

徒然なるままにて遊び綴る

風遊戯

神秘学ポエジー

第1集

2013/12/13
2014/1/26

神秘学遊戯団

光	無限	翻訳	スーフィー	ふれる	悪	魔法	旅	思い	間(あわい)	心	迷路	祈り	歌	花	種	結	恋	十字架	誘惑	窓	パントマイム	秘密	彼方	世界の呼吸	目次
三八	三七	三五	三四	三三	三一	二九	二八	二七	二五	二三	二二	二〇	一九	一七	一五	一四	一三	一二	一〇	八	七	五	三	二	

《世界の呼吸》

ぼくの世界から知らない外にでる
知らないけれどどこかで予感している世界のほうへ
するとそれはぼくの世界の
ずっと奥のほうから生まれ出てくることに気づく

ぼくの世界のなかの知らない場所に行ってみる
知らないけれどぼくの世界にずっとあつた場所へ
するとその場所はぼくの世界の
外にある場所へとつながっていることに気づく

ぼくがぼくだということ
ぼくがぼくではないということ
ふたつでひとつだとわかったとき
世界は大きく呼吸をはじめ

《彼方》

ひとさし指の彼方
はるかぼくの水平線
その向こうには何があるのだろうか

ぼくは夢見る
世界の果て
ぼくの向こう側

水平線の向こうをめざして
ぼくは旅を続ける
けれど見えるのはいつも水平線
ぼくという世界の境界線

ひとさし指の彼方から
やがてきみが訪れる
ひとさし指をぼくに向けて

地平線の向こうにはなにがあるの
ぼくはそう訪ねる
けれどきみも同じ問いをぼくに向けて

きみはだれ
どこに向かっているの
互いの問いが交差する
ひとさし指とひとさし指が交差する

ぼくときみ
それぞれの向こう側が
互いの世界の果てで交差する

世界の果てから
世界の果てへ
ぼくときみ

やがて彼方から
ぼくの顔をしたきみが
きみの顔をしたぼくが訪れる
世界をぐるりと裏返して

《秘密》

ひみつみせて ひみつみせて
ほしのひみつ とりのひみつ
はなのひみつ かぜのひみつ

秘密が知りたい！

ひとは命をかけて秘密を追い求めた

世界の果てへ

大地の果てへ

そしてひとは天空を仰いだ

かつて秘密は厳格に管理され

漏らしたものは死の責めを負った

そうして秘密は裏で世界を織りなした

秘密が漏れると世界は乱れる

そこで秘密は管理され

限られたものが世界を動かした

ひみつみせて ひみつみせて
わたしだけに ひみつみせて
せかいじゅうの ひみつみせて

秘密は守られねばならない

そう書かれた扉はもはや朽ちて久しい

秘密は秘密であることそのものを目的とした

秘密を得て世界を自らの手のもとに置こうと

甘味で危険な香りを放つ秘密に人は酔いしれた

秘密は鏡

世界の鏡

みずからの顔をうつしだす鏡

秘密の鏡には
見ようとしたものの見えない顔が映し出された
わたしという秘密の顔が

ひみつみせて ひみつみせて
わたしのかおを みんなみせて
ほんとかおを みんなみせて

秘密は開示されなければならない！
そう告げる声がつぎつぎと発せられた
開示されなければならぬ秘密などないのだから
けれどそれは与えられるのではなく
みずから得なければならぬ

世界は秘密に満ちている
けれど秘密は隠されてなどいない
ただひとがそのことに気づいていないだけ

秘密は鏡の向こうで
わたしをずっと待っている
わたしがわたしに出会うために
そしてあなたに出会うために

ひみつみせて ひみつみせて
せかいのひみつ みんなみせて
わたしのひみつ みんなみせて
あなたへのひみつ みんなみせて

秘密が愛にかわるとき
世界はわたしとあなたをめぐる
ふたりでひとりの
ひとりでふたりの
魔術的な出会いになる

《パントマイム》

ぼくらはパントマイムしてる

そこにはないものがあるかのようにしてふるまい
壁に囲まれてどうしても先へ進めなかったり
ふいうちされたり大笑いしたり

ぼくらはパントマイムしてる

そこにあるのにないかのようにしてふるまい
ところをものにしたり

愛をからだの運動にしたり

死をおそれて死者たちを見ないふりしたり

パントマイムしているのはほんとうはだれ

その世界をつくっているのはだれ

ほんとうの言葉を失っているぼくらは

からっぽのからだでにせものの自分を演じている

《窓》

好き！

それだけで

世界への窓は開かれる

けれど窓の外への恐れが

しばしばわたしに不安をつれてくる

嫌い

それだけで

世界への窓は閉じられてしまう

けれど閉じている窓は

やがてひらかれる予感にふるえている

窓のむこうの世界に憧れる

けれどそこにはなにかがあるのだろう

部屋のなかからだけでは窓のむこうはみえない

窓はその形と大きさを

わたしとあなたのあいだで

開かれそして閉じられる

わたしの心は

好きと嫌いのあいだを

壊れた振り子のように

いつもたよりなく揺れている

そしてときおりみずからを激しく打つ

わたしの体は

快と不快のあいだを

行方を失った鳥のように

いつも不安にさまよっている

そしてときに溺れときに激しく嗚咽する

心の窓がときに少しだけ開かれて
光のなかであなたが見える
体の窓がときに少しだけ開かれて
世界の色と形のまえでときめく
けれど二つの窓は別の場所にあつて
ときに互いを激しく嫌悪する

わたしの秘密を守りそして開く窓
窓のむこうに広がる
開かれた世界との矛盾のまえで
わたしは大きく深呼吸する

《誘惑》

誘惑がくる！

あらゆる感官を通して

快樂を求めよ

死をおそれ生を楽しめ

かわりにおまえの永遠をよこせと

ぼくらの生は永遠を失くしている

まるで天を追われた墮天使のように

光から生まれ光を生むべく

ぼくらは永遠を旅立った

そしてやがて永遠を忘れ去った

記憶をなくした墮天使のように

生まれ死に生まれ死に

ぼくらは問い続ける

いったいどこから来てどこに往こうというのか
道しるべとなるべき感官を複雑な迷路に導き

喜びさえも恐れや哀しみに変えて

ぼくらは蛇のように地を這い回りながら

天をうらやみ地を呪い

そのくせ天を仰ぎ見つめ地を恋い慕い

光の反対のもの

永遠の反対のものを

かぎりなく欲望する

誘惑がくる！

永遠はいまここにあるというのに

ぼくらは光の雫だというのに

誘惑がくる！
けれどやがて知るだろう
永遠を去ったことの意味を
光へと帰還する者として

《十字架》

磔られたのはだれか
わたしは自分がなにをしているか知らぬまま
十字の上のひとをあざ笑う

天は裂け地は轟くが
わたしはそれにさえ気づかない
そしてみずからを何度も欺き続ける

罪のないものはこの者に石を投げよという
けれどわたしは石を投げることをためらわない
それほどにみずからの言葉とふるまいを省みないからだ

友なるひとよ
わたしの十字架がふるえるのだ
わたしの天が
わたしの大地が裂けるのだ

友なるひとよ
わたしはこの手でこの爪で大地を掘り
この涙で種に水を注ぎ
そして天に向かいその芽を伸ばそう

天と地が幸せに結ぶように
貧しき心と身体で
十字の上で友を呼ばわろう

《恋》

人であるということは
恋しいということなのです

恋する人は探します
あなたに伝える言葉を
どこにでもある言葉でしかないけれど
かけがえのない言葉を

恋しくて
せつなくて

思いは言葉にならないけれど

人になるということは
恋しいということなのです

天は地を乞い
地は天を乞い
神さまもひとになって

その恋を言葉にしようとしたのです
その身体をすべて使って
天と地をむすぶために

胸のおくから声がする
あ・い・に・こ・い
会いに来い
愛に恋

人であるということは
恋しいということなのです
わたしのなかの天と地が
あなたのなかの天と地を
恋しがるといことなのです

《結》

くちづけましょう
あなたとわたしをむすぶため
ひみつをとろりととかすため
甘い甘いときじくの香の木の実を食べましょう

恋人は熱い息でささやくのです
あなたが好き
それだけであなたとわたしはむすばれる
そして永遠へとむすばれる

踊りましょう
歌いましょう
あなたとわたしをむすぶため
時に永遠をむすぶため

くちづけましょう
むすびましょう
白と黒
善と悪
天と地
そんなみんな

くちづけましょう
パンドラの箱からでてしまった
苦しみや哀しみに
かぎりなき希望をむすびましょう

《種》

どこからやってきたのだろう
この小さな種は

このマイクロコスモスには
はるかに見あげる天空が
照らし出されている

わたしはこの種を
大地の闇に埋め
水を注ぎ
時を待ちながら
光のもとに連れ出そうとする

この小さな種には
天空のどんな思いが
こめられているのだろう
その神秘的な力が
わたしをかぎりなく魅惑する

それは
わたしからあなたへ
あなたからわたしへと
互いを照らし出すときの
光と闇の織りなす愛にも似ている

満ちてくる不思議な鼓動
宇宙が織りなされていく音楽とリズム
この種からは何が育っていくのだろう
わたしはあなたとともに

大地に身をゆだねながら
はるか天空を見あげる

すると星が流れる

まるで小さな種が踊っているように

そしてわたしとあなたも

天空と大地の織りなす幾何学模様にあわせて
光と闇のダンスを踊りはじめる

《花》

咲くために

あなたは何を裂いてきたのだろう
深い深い痛みの中かで

咲くために

あなたは何を抱いてきたのだろう
深い深いいつくしみとともに

あなたという幹は

色を秘め湛え

じっと待ち続ける

やがてくる日のために

その色は惑星の色

光と闇が交錯し

たえず変転する魂の色

時が満ちると

あなたは大きく両手をひろげ

こぼれるように色を放ち

満面の笑いを空に放つ

しかしその笑いは

鳥のように空へは行けない

風に身をゆだねながら

あこがれを天空にむけ

また大地へと帰っていく

あこがれはむすびの秘密

天と地が交わしあう魔法のことばで

今日は昨日の《種》を受けて《花》です。種はやがて芽を出し茎を葉を伸ばし、やがて花を咲かせます。シュタイナーによれば、花は鳥になろうとしているといえます。でももちろん、鳥のように空に羽ばたくことはできません。そのあこがれが魔術的に変容し、やがては実りになっていく・・・というイメージを言葉にしてみました。

甘さを増し芳香を放ちながら
みずからを散らしていくのだ
みずからを捧げる祈りとともに

《歌》

歌を忘れたわたしには
鳥のことばが聴けません
空の彼方にあるという
秘密の里に行けません

歌を忘れたわたしには
月のことばが聴けません
満ちては欠けるそのかたち
紡ぐ銀糸が織れません

歌を忘れたわたしには
光のことばが聴けません
聖（ひじり）が告げる真実を
知るすべさえなくただ涙

歌を忘れたわたしには
死者のことばが聴けません
生まれ生まれて死んでゆく
黄泉の世界が見えません

歌を忘れたわたしには
愛のことばが聴けません
奏でてはじめてそれと知る
声の秘密が閉じられる

いうまでもなく童謡「かなりあ」（詩・西条八十）の「歌を忘れた・・・」を使いながら、「歌」ということなので、7・5調で表現しています。

ちなみに、「歌」という漢字は、「可」と「欠」で構成されていますが、白川静さんによれば「可」は「器」のかたち、「欠」は前を向いて口をひらき訴えているかたちだといいます。そういう意味では、わたしたちはみずから「器」のようになって、その器をさまざまな「ことば」で満たし、それを神に訴え、神意を読むという営為を必要としているのだともいえそうです。ですが、私たちはその「歌」を忘れてしまって、こうしてさまざまな真実から遠くなってしまっているのでしょう。

《祈り》

わが願いを叶えたまえ！
 その願いが祈りにかわるとき
 すでにそこに願いはない
 願うものもそこにはいない
 ただ祈りがあるだけ

祈りはどこからくるのだろう
 祈りあれ
 するとそこに祈りはある
 けれどそこに祈るものはいない
 ただ祈りがあるだけ

祈るとき
 そこに
 わたしはいない
 あるのはただ
 祈り
 そして永遠

わたしは
 だれでもないものになって
 祈りを捧げる
 わたしはどこにもいない
 いまここにいて
 祈りそのものになる

初詣でいろいろな祈願がされているお正月ということもあり、願いと祈りの違いについてシンプルに書いてみました。「～でありますように」というように、ある目的を叶えようとするのが祈願で、それはそれですが、どうも神社にいてそういう祈願をするというのは個人的にはしないようにしています。その内容がどんなにすばらしいものであったとしても、どうしてもそこには祈る「わたし」のフィルターがはいてしまうからでもあります。無病息災にしても平和にしてもあえて祈らない。ですから、神社などで手を合わせるときには、「あるべきものがあるべきようになりますように」としてひふみの祝詞を唱えるようにしています。それでも、祈るのは「わたし」でしかないのですが、できれば祈るときには、「わたし」は「だれでもないもの」である「わたし」でありたいと思っています。もしそうすることができれば、わたしは祈りになることができるのではないかと。ことばをかえていえば、祈りを「幅」にしてしまうのではなく「奥行き」にしたいと。

《迷路》

迷路の入口に立つ
 出口を探さなければならない
 はたして出口はあるのだろうか
 その保証さえどこにもない
 けれど行かなければならない
 このまま迷路の前で
 立ち往生するわけにはいかないからだ
 迷路を上からみれば
 自分が歩むべき道が見つかるだろうか
 鳥になればいいのにとふと思うが
 鳥ならば地上を歩く必要はないだろうかと思ひ直す
 そして出口を探すことが目的であると同時に
 路上でしか見つからないものを見つけていくことも
 目的であることを思い出す
 出口とはいったいなんだろうか
 出口からでたあとのことを自分は考えているのかと自問する
 そしてまた迷路の入り口に立つ前のこともふりかえってみる
 おそらく迷路の前にも迷路があったのだ
 迷路を出たところが今度の迷路の入り口だった
 そしてこの迷路の出口もまた
 あらたな迷路の入口になるのだろうか
 いっそのままでここで立ち止まっていようかとも考える
 どちらにせよ世界には迷路のなかと
 入口と出口以外はないのだから
 どこにいても変わりはないじゃないかと
 今自分が迷路のどこにいるのか
 そしてこの迷路がいったい何なのかさえ

今回は散文詩的なスタイルで神秘学ポエジーにしてみました。全部で7行×5で構成しています。外なる迷路のなかにいる私たちは、内なる迷路にも気づくことで、その照らし合わせのなかでみずからを認識していくことも重要なのではないかということを示唆するというのがそのテーマだともいえるでしょうか。

余談ですが、今回のテーマは、まず「出口」ということから入りました。ちょうど出口王仁三郎の歌集を読んでいて、その「出口」ということで、自分がいま探している出口のことを思ったのがきっかけです。出口王仁三郎といえは、出口なおとペアで大本の神業をなしました。それらの神業というのはある意味で、西洋におけるシュタイナーの東洋的な裏返しのように思っているのではないかということ以前から思っていたりします。もちろん内容そのものの裏表というよりは、霊的な裏表という感じ。ここにも、外と内、表と裏の両面というのがあるようにも思います。

おそろくどこまでいっても知るすべはないのだろうし

それでも路を行かなければならないと思い直す

ときに同じ路をぐるぐると彷徨っているだけだとしても

立ち止まったままでいるわけにはいかない

路を歩くことそのものが自分に他ならないのだろうから

そして迷路とはいったい何なのだろうかと問いかけてみる

すると自分のなかにも迷路があることにふと気づく

外の迷路と内の迷路は照らしあっているのではないかと

《心》

心はどこからくるのでしょうか
 心は自分の息なのです
 吸っては吐いて
 吐いては吸って
 心の秘密とともに歩みましょう
 わたしと世界をつなぎましょう
 ときに腹が立ったり考えすぎて
 上まで登って降りられなくなったなら
 行ってこわがらなくてもいいといい
 いっしょにおろおろ涙を流しましょう
 そして涙が川になったなら
 心の手を引き舟に乗せ
 静かに静かに川を下りましょう
 決して急いではいけません
 滝のような場所は避けましょう
 胸の泊りではばらく休み
 やがてお腹のほうへとつなぎましょう
 わたしはあなたに心を移し
 心があなたに移ります
 どきどきどきどき移ります
 そして今度はあなたから
 わたしに心が移ります
 どきどきどきどき移ります
 わたしがわたしであるために
 わたしはあなたをつなぎます
 あなたのなかにつなぎます
 つないだあなたを感じたら

「息」という漢字は「自」の「心」と書きます。そのことから「心」をとらえてみました。最近心はどうも「脳」にあるかのようにいわれるようになってさえいますが、かつて心は「胸」や「お腹」のほうにありました。

「心」という漢字が生まれたのは、漢字が生まれた紀元前1300年頃（その頃5000種類くらいの漢字があったそうです）から300年ほど経ってからのことだそうです。漢字がなかったからといって「心」がなかったとは必ずしもいえませんが、どうも「心」という漢字が生まれた頃かた、人間は「心」の悩みを持つようになったようです。また、古代ギリシア語やアッカド語、シュメール語のような古代の言葉をみると、「心」の動きは「内臓」の動きと深く関係していたようで、新訳聖書のなかで、日本語で「憐れみ」と訳されている「スプラクニゾマイ」という言葉はもともと「内臓が動く」という意味をもっていたそうです。心を感情を内臓で感じていたと。

そういう意味でも、「心」を頭のほうではなく自分のからだのなかに深く感じ取りながらも、「息」という言葉で象徴されているように、自分の内と外のあいだ、つまり世界とのあいだの呼吸としてとらえることで、縮こまった心を解放することもできるのではないのでしょうか。そしてさらにそれを「わたし」と「あなた」の交感としてもとらえることができれば……。*一部、宮澤賢治のパロディーも入れてみました

今度はあなたがわたしのなかで
あなたの心をつなぎます

心は自分の息なのです
わたしの心とあなたの心
絶えずどきどき律動し

世界は織り成されてゆくのです

《間（あわい）》

間に潜むものがやってくる
 息をひそめて声なきままに
 見たこともない
 けれどどこか懐かしい
 そんなものたちがわきあがる
 音と音の間にある
 沈黙の音楽のように
 生と死の間にある
 時間を超えた物語のように
 わたしとあなたの間にある
 合わせ鏡の世界のように
 どこにもない空間が
 あらゆる空間を生じさせる
 どこにもない時間が
 あらゆる時間を紡ぎ出す
 はるか無限の彼方から
 いまここにある無の間から
 存在の裏返った世界の向こう側から
 すべての源にある泉から
 わたしの心の深い深い闇を抜けて
 わたしの身体の深い深い叡智を呼び覚まし
 夢幻の世界から姿なきものたちが
 福音の使者のように立ち現れる
 するとわたしはぐるりと裏返る
 わたしでないわたしが

今日のテーマは「あわい（間）」。ちょっとダークファンタジーというかホラー風の入り方をしてみたのは、「間」という文字と「闇」という文字が似ているからというもあります。「門」のなかに、「間」あ「日」が、「闇」は「音」が入っています。おもしろいですね。そこらへんは、このポエジーのなかでは突っ込んではいませんが。

このテーマを書いたのは、能のワキ方である安田登さんの『あわいの力／「心の時代」の次を生きる』（ミシマ社／2014.1.6 発行）を興味深く読んだことから。そこに示唆されている「あわい（間）」の観点とはかなり違っているところはありますが、「あわい（間）」についてぼくのなかからいま立ち上がってくるなにかを書いてみたいと。

存在の間から浮かびあがる
そしてわたしに告げる
おまえはわたしのだと

《思い》

わたしの思いはわたしなのだろうか
わたしは自分がだれなのかを思い
あなたとともにいて思い
語りあいながら思い
読みふける物語のなかで思う

わたしの思いはくると変わりながら
とどまるところがない
そしてまた自分がだれなのかを思う

思いはどこからくるのだろうか
あたまから降りてくるのだろうか
からだから浮きあがってくるのだろうか
天空からそして大地からのびてくる
糸を与えられながら織られていくのだろうか
その模様はつねに変化しつづけながらも
わたしでしか織りなせない模様を見せている

そしていまはまだ織りなせない
その先に見え隠れする模様のことを思い
あなたと織りなしていく模様のことを思う

わたしはいまどこにいるのだろうか
わたしのこの思いとともに
わたしがかつて織りなした思いとともに
わたしがまだ織りなせない思いとともに
わたしの思いはかぎらない宇宙の織物のなかで
わたしの星座をつくりだそうとしているのだろうか

《旅》

旅が旅であるためには

そこに謎かけがなければならぬ

スフィンクスの問いのような

わたしの旅が問う

おまえは何に出会いたいのだ

その答えはいつもわたし自身のはずだが

そう答えることは容易なことではない

答えと自分が生き別れになってしまったりもする

会ったことのないひと

行ったことのないところ

それらが彼方で待っている自分だとわかるためには

迷路のような旅路を歩まなければならないのだ

旅は終わらない

どこにいても旅を続けている

まだわたしでないところへ

そしてやがて来るべきわたしであるところへ

わたしが謎だからだ

わたしが旅だからだ

ぼくは腰が重いのと面倒がりなので、あまり旅を好むほうではないけれど、それにもかかわらず、どこに行っても非日常感を感じないというか、どこにいても、「自分のいるところ」という感じを持つことが多い（ただ、鈍感なだけなのかもしれませんが）。それでも、自分はいつも旅している感じがあるのは、自分を旅のプロセスのように感じて生きているということなのかもしれません。

ちなみに、スフィンクスの問いというのは、「朝は四本足、昼は二本足、夕は三本足。この生き物は何か？」で、答えられないと食い殺されたそうですが、オイディプスが正解（「人間」）を答えるとスフィンクスは崖から身を投げたという有名な話です。赤ん坊の頃は四つんばい、やがて二本足で立って歩き、老人になると杖を突くので三本足になる、という「朝」「昼」「夜」を人間の一生を一日に例えた比喩。

《魔法》

魔法にかけられた王子さまが
カエルからもとの姿に戻るように
箱を飛び出して踊り続けていたおもちゃが
おもちゃ箱に帰って眠りにつくように
魔法から目覚めるためには
愛の不思議な力が
そして光を呼び戻す呪文が必要だ

世界は魔法に満ちている
魔法の魅力に酔いしれたぼくたちは
夜の世界を遊び踊り続ける
そしてそこを自分の世界だと思い込み
光を失って姿を変えた愛に魅惑されてしまう
それと知らないままに
それと知っていても知らぬそぶりで

ぼくらは魔法を学ばなければならぬ
魔法をかけることではなく
魔法から解き放つ呪文を
魔法世界の光をほんとうの光へと
メタモルフオーゼさせるために

ぼくらは大地と水と火と風たちを
魔法から解き放たなければならぬ
星辰がつくりあげてきた世界の物語を
もういちど紡ぐ力を取り戻すために

やがて光は満ちてくるだろう
十字架の上につけられたまま眠りこけていた
ぼくらの目覚めさせるために

今回のテーマは、魔法というか「解放」です。ぼくらの目の上の梁をいかに取り除くかということでもあります。そのためにも、ぼくらがいまほんとうの世界であると思っている世界がある意味で魔法にかけられてしまっている世界であることに気づくことが必要だということからはじめています。

魔法を解かれた大地は鳴動し
光の雷鳴はそこかしこに轟くだろう
そしてヴェールを脱いだぼくらが
ほんとうの光で照らしだされてくるだろう

《悪》

ひとは天使ではない
 だから天使のまねはしないでいよう
 ひとがひとだということは
 ひとでしかできないことをするということだ

天使よりも墮天使が
 処女よりも娼婦が
 深くひとへと降りていけるように
 わたしはみずからの深みへと降りていこう

悪に出会ったならば
 その悪を名指すまえに
 みずからの悪へと降りていこう
 そうすることではじめて
 その迷路を抜ける道を見出すことができるだろうから

私たちは囚われ人なのか
 そう問うことはじめて
 みえてくるものがある
 怒りや妬みに囚われていることを知れば
 ひとはその悲しみとともにいて
 そこから解き放たれる喜びに満たされることもできるから

ひとは天使ではない
 墮天使は天使から自由になろうとした
 天使は自由ではない
 だからだ
 けれどひとは墮天使から学ばねばならない
 みずからの悪から学ばねばならない
 陰影を湛えた深い慈しみの光と熱で

今年が新月から始まり、今日、満月になります。満月のときは狼男に変身するように、そうしたダークになりがちな力が満ちてきがちなきでもあります。ダーク・ムーン。だからというわけではないのですが、今日はみずからの内にあるそうした力に目を向けながら・・・ということで、「悪」というワードが訪れた感じもあって書いてみました。

悪を溶かさなければならぬ

ひとは天使ではない

だから天使のまねをしてはならない

自由を手放してはならない

たとえそこに苦しい陥穽が待ち構えているとしても

ひとはひとのなかで愛へと向かわなければならぬ

《ふれる》

あなたにふれる

ふれることで

わたしはあなたに近づく

けれど

ふれることで

わたしはあなたとの違いを知る

あなたにふれる

ふれることで

ふれることのできないものを感じ始める

けっして近づくことのできないものさえも

ふれあうことで

わたしはあなたとの境を超えようとする

ときに弾き手となり

ときに楽器となり

互いのいのちの弦を響かせようとする

大きな不協和音さえ生みだしながら

それと知らずにふれているものがある

手は頬は空気にふれている

思いは世界のさまざまにふれ

心はいつのまにかあなたにふれている

そしてわたしの心の奥は

いつも宇宙の衣につつまれている

つつまれながら

まだ見ぬ

けれどほんとうは

いつもいつもそばにいたあなたにふれようと

よちよち歩きをはじめ

《スーフィー》

笑ってよ

ぼくのなかのスーフィー

悲しいときは

おろおろ歩き

うれしいときは

くるくる踊り

ぼくのなかのスーフィーは

ときに行方を失って

自分がスーフィーだということを

忘れてしまうけれど

話してよ

ぼくのなかのスーフィー

天にむかつては地を示し

深く深くどこまでも降りていき

地にあつては天にむかい

はるかな翼で飛翔する

ぼくのなかのスーフィーは

いつもいつも

ぼくのそばにいて

ほら自分を思い出すんだ

そう語りかけている

スーフィーの叡智とはちょっとかけはなれた感じでもあるようなポエジーになってしまったけれど(;;)、ぼくのなかのスーフィーはぼくとわりと等身大でもあって、情けないときには情けないなりにするのがいいとぼくに語りかけてくれたりする。悲しいときは悲しいように、うれしいときはうれしいように。で、ぼくはいろんなときに自分のなかのスーフィーを呼び出して、自分を思い出そうとしたりする。もちろん、なかなかうまくいかないときのほうが多くて、悲しいときに悲しくないそぶりをしたり、うれしいときに気取ったりもしてしまうのだけれど。

ちなみに、ぼくはルーミーやガザリーといったスーフィーが大好きで、今もちょうど平凡社の東洋文庫(844)になったばかりの『中庸の神学／中世イスラームの神学・哲学・神秘主義』を読んでいるところだけれど、ぼくにとっていちばんなりたい理想はといえば、その筆頭がスーフィーだったりする。なんか、身近な愛の人って感じが強くあったりする。もちろん、自分はそれとははるかに遠いところにあるんだけれど、憧れとして。

ところで、竹内まりやに『元気をだして』という歌があって、そのテーマ(「彼だけが男じゃない!」という失恋のあとの立ち直りの歌でしかないけど)とはまるで別物ではあるけれど、元気がほしいときには、この『元気をだして』をスーフィーの召還魔法のようにして聴いてみることもある。まあ、歌というのは不思議なことに、そんなハチャメチャな処方箋としての威力があったりもするから、これもまた魔法なのだろうと思う。・・・というのは、まるで余談。

《翻訳》

空をどう訳せばいいのだろう

星は

樹は

海は

そしてあなたは

世界という書物を読むには

そこに書かれてある言葉を

自分の言葉に翻訳しなければならぬ

世界はどんな言葉で書かれているのだろう

それさえ知らないままに

ぼくは世界を翻訳しながら生きていく

ときには世界に書かれていないかもしれないものさえ
翻訳したのだと信じこみながら

ぼくはどんな言葉で書かれているのだろう

問われないとき

ぼくはそれを知っているが

問われたとき

ぼくはそれを知らないで途方に暮れる
まるで時間のように

あなたはどんな言葉で書かれているのだろう

ぼくの言葉

あなたの言葉

それはどこまで訳すことができるのだろう

ぼくはあなたの言葉を追いかけ

乏しい自分の辞書を調べ続けるのだけれど

互いの辞書の言葉がかみあわないまま

空回りし捻れて行方を失ったりもする

ぼくには外国語の翻訳ができるほど堪能な外国語がない。もちろん、日本語でさえもそれほど自由ではない。でも、ぼくたちはみんな世界を自分なりに「翻訳」して生きているといわれれば、確かにそうだと思う。ちょうどフランス文学・翻訳家の野崎歓『翻訳教育』（河出書房新社・2014.1 発行）を読んで、そのことをいろいろ考えてみている。そういえば、松岡正剛は「翻訳」とはいわず「編集」という言葉を使っているが、広い意味でいえば、意味するところは重なっているように思う。

天上に大きく広がる星空を見上げながら
 足下で静かに息づいている大地をたしかめながら
 それをあなたにどのように伝えたらいいだろう
 そう問い続け
 ぼくは言葉の迷路のなかを空しく歩く
 沈黙よりも深くあなたに届く言葉を探して

「世界」はそのままではぼくらの前に姿を現してはくれない。なんらかの形で「編集」され「翻訳」された姿で現れてくる。だからその姿がほかのひとと同じだとはかぎらない。そのことをちゃんと意識していないと、ただでさえむずかしいコミュニケーションがなおのことむずかしくなる。

ちなみに、問われないときに知っているが、問われたときに知らないというのは、アウグスティヌスの時間についての話のもじり。しかし、ハムレットではないけれど、「あなたは何を読んでいるの」と問われて、説明できずに、「言葉・言葉・言葉・・・」としか言えないようなときがあったりする。内容についてどんなに言葉を費やしても伝えられないものについては、ある意味で沈黙してしまうしかなかったり。だから、「言葉・言葉・言葉・・・」。

《無限》

はるかはるか
かなたへ

わたしは旅に出なければならぬ
まだ見ぬあなたを探して

このひとさし指の先の無限
そこにあなたはいて
わたしがくるのを待っている

そこはおわりとはじまりが
ひとつになるところ
わたしの無限とあなたの無限が
合わせ鏡のなかで結びあうところ
光さえ届かないかなた
無限遠点で裏返るところ

はるかはるか
かなたは
わたしとあなたの
どこにもない U-topia
けれど
いまここにある永遠

はるかはるか
かなたへ
わたしは帰っていかなくてはならない
あなたというわたしを探して

《光》

光あれ！

すると

光はあつた

そして

ぼくらはそこにいた

けれどぼくらは

じぶんが光であることを

忘れてしまった光の子ども

光の国から来た子ども

そして光が苦しんで生み出す

色たちの世界で生きている

光は見る事ができない

見えているのは

光が闇に交わって放たれた

色たちの踊りだけ

苦しみのなかから生まれ

地上を綾なしている色たちの世界だけ

光の力を忘れてしまうと

ぼくらはじぶんのことがわからない

見えているものだけを信じ

見えないもののがわからない

光を見るためには

光を自分のなかに持たなければならぬのだから

言葉を発するためには

自分のなかに言葉がなければならぬように

あなたとほんとうに出会うためには

ぼくのなかのあなたを見つけなければならぬように

いうまでもなく「光あれ」というのは、創世記の「天地創造」のところで神が発することば。そのことにヨハネ福音書の「はじめにことばがあつた（いた）」ということを重ねて書いてみました。ここでいう「ことば」はキリスト存在のことでもあり、ぼくらはその光を宿しながら、そのことを忘れてしまっているその子どもであるというイメージです。そしてそのイメージに、色は光の受苦であるというイメージと色即是空の地上的な物質としての色のイメージも重ねてみます。

光あれ！
すると
ぼくらのなかに
光は生まれた
ぼくらは光の子どもなのだから